

博物館

ニュース

No.55

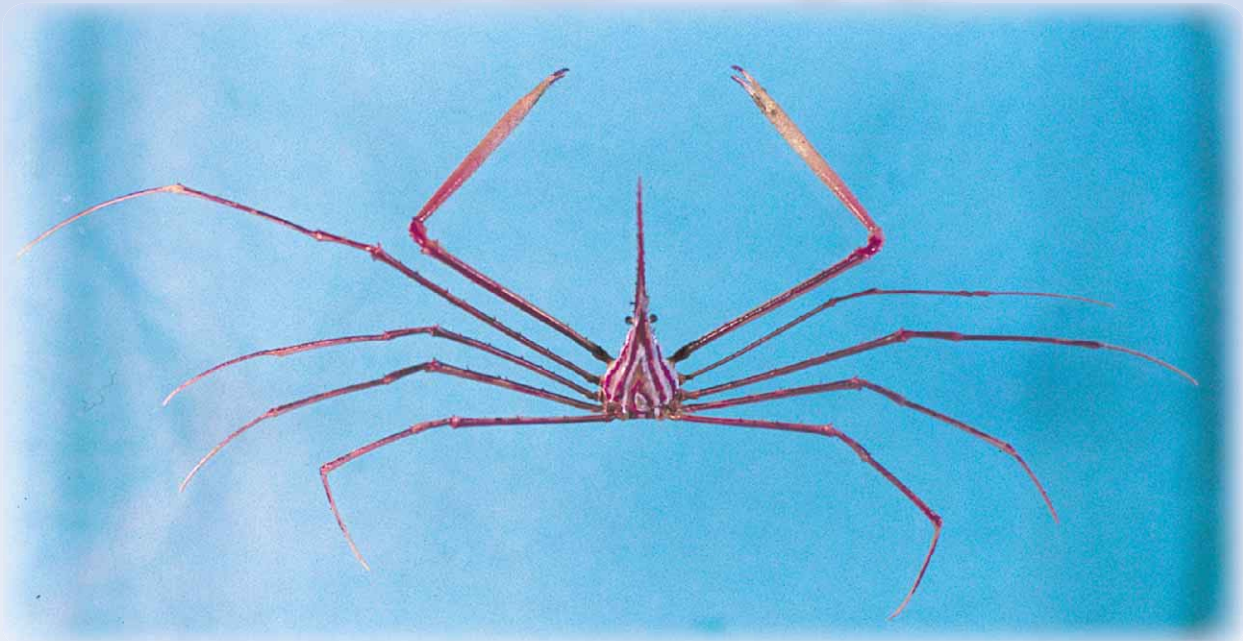


図1 アロークラブ (甲らの幅約1.5cm)

図2 ヒゲガニ (甲らの幅約2cm)

図3 ヒメセミアビ (体長約7cm)

アロークラブ (図1) を初めて見たとき「こんなカニがいるのか」と驚きました。その意表をつく形は造化の妙を思わせます。同じような感想を抱かれる方も少なくはないでしょう。コンパクトなロボットといった風ぼうのヒゲガニ (図2) やトラックのような姿で海底をほうヒメセミアビ (図3) もなかなか愛嬌があります。一般にはあまり

知られていないのですが、エビやカニにはたくさん種類があり、その姿やくらし方もさまざまです。ここで紹介しているのはそんな多彩なエビやカニの中から選んだ3種です。おいしいのかどうか…食べたことがないのでわかりません。これらのカニの剥製は企画展「エビとカニ」で展示します。
(動物担当：田辺 力)

「新町橋渡初図」の下画

大橋 俊雄

1 守住貫魚と「新町橋渡初図」

守住貫魚（1809－1892）は、徳島出身の住吉派の画家です。江戸の終わりまで徳島藩の御用絵師をつとめ、明治の初めに神官になりましたが、やがて大阪に出て制作に専念し、晩年には帝室技芸員に選ばれています。

彼の作品の一つに「新町橋渡初図」（個人蔵・図1）があります。新町橋は、徳島城下の新町川に架かっている橋で、かつては交通の要衝として知られていました。元治元年（1864）11月に、藩による修復が終わって渡り初めが行われました。この図はその時の様子を描いたもので、橋を中心に城下の賑わいや、徳島城がある城山を克明にとらえています。絹の画面に上品な彩色がほどこされており、貫魚の代表作として県の文化財に指定されています。

2 「新町橋渡初図」の下画

「新町橋渡初図」は、何段階かの下描きをへて完成したと思われます。最近その1枚が発見されま

したので紹介します。

問題の下絵（当館蔵・図2）は、守住家に伝わっていた大量の粉本・面稿類の中にありました。完成した本画のほぼ原寸大で、描かれている内容から、構想がほぼ固まって細部が整えられる以前の下画と推測されます。画中に、貫魚の自筆による留書（図3）があり、紙背に、明治以後の題箋（図4）が貼られています。

留書には、「元治紀元…」と主題の説明があり、その横に、「慶応二寅五月日」と書かれています。この年紀が下画自体の完成を示すのか、本画のそれなのか定かではありません。しかし慶応2年（1866）5月に、「新町橋渡初図」が完成したか、制作途中であったのは確かです。今まではっきりしなかった、本画の制作期が明らかになりました。

なお、題箋の下半分には「明治十三年鉄橋成」とあります。新町橋が、明治13年（1880）に鉄橋に架け替えられたことは、博物館ニュースNo.41（2000年12月発行）に「新町橋が生まれ変わった」と題して解説されています。御参照ください。



図1 守住貫魚筆「新町橋渡初図」 松浦菊男氏蔵 縦84.0cm×横115.0cm

3 完成画を考える

新たに発見された下画と、完成した「渡初図」を比較してみたいのですが、まだその機会がありません。ここでは、完成作について感じられることを少し述べたいと思います。

「渡初図」では画面中央を川が横切り、手前から奥へと橋が架かり、対岸には麓が連なり、遠くには徳島城のある城山が、霞をへだてて浮かんでいます。空には5羽の真鶴が舞い、朝日がさし昇っています。

この作品から連想されるのは、近世にしばしば描かれた蓬莱山図です。蓬莱山は、東海の小島にあり、仙人が住むという伝説上の山です。松竹梅が生え、鶴亀が棲み、朝日がさすといわれています。新町川をへだてた城下が、あたかも海中の島を思わせ、霞に浮かぶ城山が、蓬莱山そのものに重なり、鶴と朝日がそえられています。新町橋が、理想郷に向かう入り口にたとえられているのは、言うまでもありません。

発見された下画では、城山が小さく、真鶴が城山よりも高く飛び、朝日ももう一まわり大きかったのを、切り貼りや白塗りで修正しています。もとのままでは、城山よりも、真鶴と朝日の方が目立ってしまうので改めたようです。なお、鶴は実

際に徳島に飛来したそうですので、巧みにその姿を借りて、画面を盛り上げたのでしょう。

完成作では、橋の手前詰めに、蜂須賀家の家紋である左卍紋を染めぬいた幔幕が張られています。藩が渡初めに関わったことを示していますが、下画では、人物を前に配して家紋を隠しています。

また「渡初図」は、渡初めが主題であるのに橋上に人影がなく、式の直前の期待にあふれた様子がとらえられています。渡初めの当事者が、藩主がそれに近い人であるため、描くのをひかえたのではないかと推測されます。

(美術工芸担当)

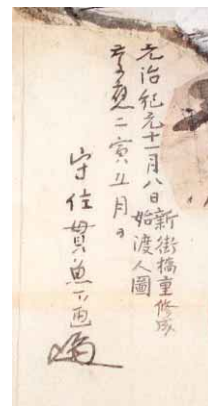


図3 下画留描

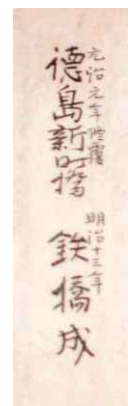


図4 題箋

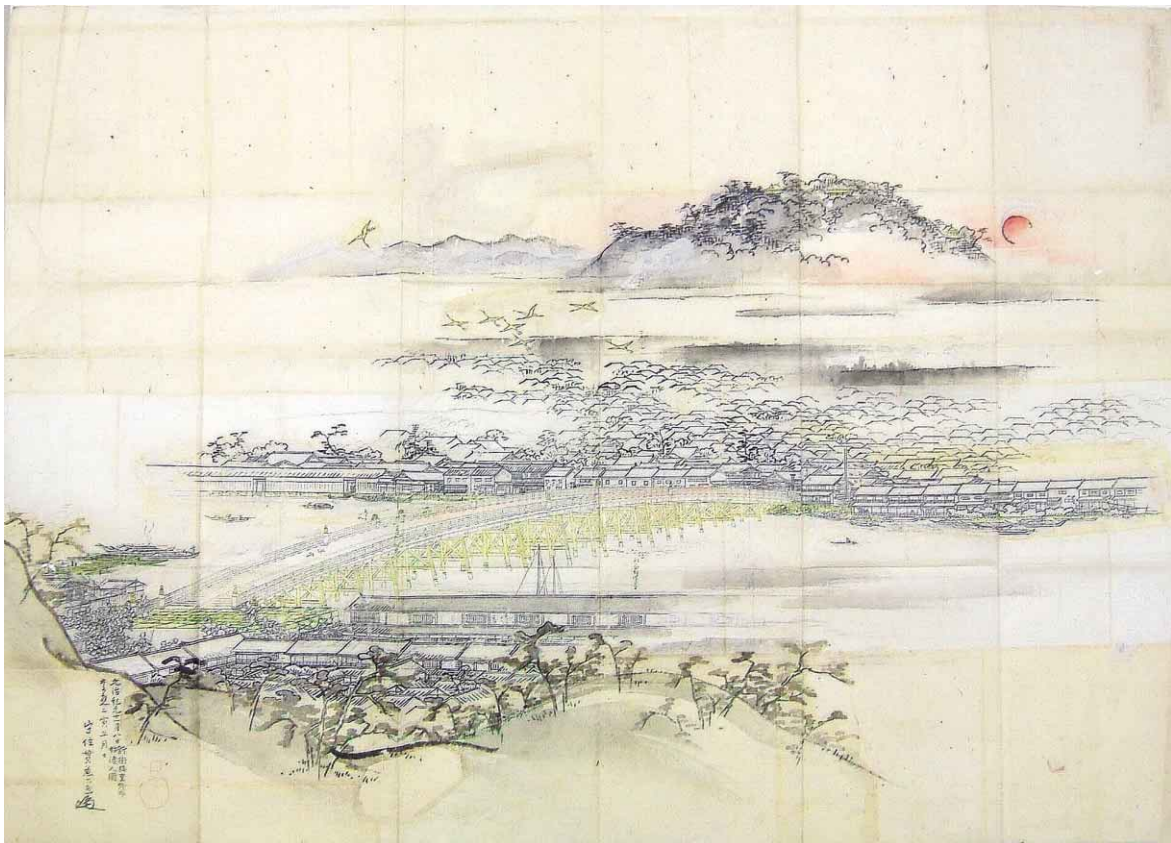


図2 「新町橋渡初図」下画 徳島県立博物館蔵 紙本彩色 縦79.5cm×横112.1cm

エビとカニ

おいしいということもあって、エビやカニはなじみの深い生き物です。しかし、食用にされるガザミ（ワタリガニ）類やクルマエビなどの他にも身近な海や川にたくさんの種類のエビやカニがすんでいることはあまり知られていません。この企画展では以下のような内容で、知られざるエビとカニの世界をご紹介します。

【展示構成】

- **世界のエビとカニ**（図1～4：表紙もご覧ください）
世界最大のカニであるタカアシガニの剥製など、日本をはじめ世界各地から得られた数多くのエビ・カニ類の剥製を展示します。また、エビ・カニ類の生態などについてもご紹介します。
- **寄贈されたエビ・カニ類剥製**
オホーツク海および牟岐沖のエビ・カニ類剥製（図5）、徳島近海産エビ・カニ類剥製、由岐沖産タカアシガニ剥製など、当館に寄贈していただいた剥製を展示します。
- **徳島の淡水産エビ類**（図6）
徳島の川にすむエビ類を水槽で飼育展示します。生きたエビの体は透き通っていてその美しさは格別です。
- **徳島の河口干潟のカニ**
干潟にすむシオマネキなどのカニ類の分布や生態についてご紹介します。
- **エビ・カニの絵を描こう**
展示室内に画用紙と色鉛筆等を置いて、観に来ていただいた方に展示してあるエビ・カニの絵を描いていただいて、それを展示します。観に来られた方はぜひお絵描きに挑戦してください。



図1 エメラルドクラブ
甲らの幅約2.5cm



図2 トゲナシヒワガニ
紡錘形の甲らが印象的なカニ。
甲らの幅約2cm



図3 テナゴブシ
長いハサミと丸い甲らが特徴。
甲らの幅約3cm



図4 セミエビ
体長約20cm。名のとおり
セミのような比較的大型
のエビ



● **人形劇「カニのきもち」**
展示室内でカニを主人公とした人形劇を開催します。
8月12日（木）～15日（日） 13:30～、15:00～
他にも、日曜日を中心に数回開催予定。



図5 浅田さんと寄贈していただいた剥製



図6 透き通る体が美しいスジエビ
体長約5cm（撮影：井手口佳子氏）

- **会 期** 平成16年8月12日（木）～9月20日（月）
休館日：月曜日 ただし9月20日は開館
- **会 場** 博物館企画展示室
- **観 覧 料** 一般200円／高校・大学生100円／小・中学生50円（20名以上の団体は2割引）
※土・日・祝日、および夏休み期間中の小・中・高生は無料
- **展示解説** 8月15日（日）と29日（日）
両日とも午後2時～3時 企画展観覧料が必要です

県立博物館の人文系収蔵資料は、考古・歴史・民俗・美術工芸の4分野により構成されています。

今回は、これまでほとんど公開したことのない資料の中から、特に歴史的に重要なもの、話題性に富むものを紹介します。

●おもな展示資料

- ・考古分野
石臼（若杉山遺跡出土）
- ・歴史分野
菅生家文書、太龍寺文書、日露戦争関係資料ほか
- ・民俗分野
屋台、浄瑠璃用人形、箆笥、長持、風呂、
經理用具（錢枡、算盤）、屋号印、重箱、
三ツ盆、花火関係資料ほか
- ・美術工芸分野
波時絵鞍（飯塚桃葉作）、鶏時絵印籠（飯塚
桃葉作）、竹筒花入銘旅衣（伝小堀遠州作
小堀権十郎箱書 蜂須賀家旧蔵）、守住家画
稿（守住貫魚）ほか



いずものかみときありほうしよ
出雲守時奉書（菅生家文書）



屋台（阿波町北岡地区）



鶏時絵印籠

- 会 期 平成16年6月18日(金)～7月19日(月)
休館日：月曜日 ただし7月19日は開館
- 会 場 博物館企画展示室
- 展示解説 (当館学芸員による展示資料の紹介)
6月20日(日)と7月18日(日)
両日とも午後2時～3時

観覧無料

最近の昆虫の話題—地球は暖かくなったのか？

地球温暖化が問題になっていますが、はたして地球は本当に暖かくなったのでしょうか。たしかにここ数十年間でみても年平均気温が1～2度上がっていることは知られています。では、温暖化の影響は昆虫の世界にも起こっているのでしょうか。

チョウのなかまでは、以前知られていた分布域から、さらに北方へ広がりつつある種が64種もあり、それは日本だけでなく、世界中で見られるということです（吉尾, 2002）。

今回は、最近、チョウやガの世界で分布を広げつつある身近な種をご紹介します。

ナガサキアゲハ

このチョウは、東南アジアからインドまで広く分布しています。日本産はオス、メスともに後ろバネに突起を持たないことから他のアゲハチョウのなかまからはすぐに見分けられます。

本種は、図1に示したように、1945年頃までは四国でも南部にしか見られず、徳島県南部で見られるようになったのは1950年代です。その後、すぐに徳島市内などでも普通種になり、1970年代から80年代には淡路島から大阪や京都などでも見つかりました。それで終わりではなく、90年代には愛知県、静岡県、そして2000年には関東地方まで分布を広げたのです。

大阪府立大学の吉尾さんと石井さんは、本種の分布拡大の原因を研究し、ナガサキアゲハは蛹で越冬するため、蛹の耐寒性と、その地域のもっとも寒い月の気温を調べました。その結果、北限地域の温度が上がるにつれて分布が北へ広がっており、

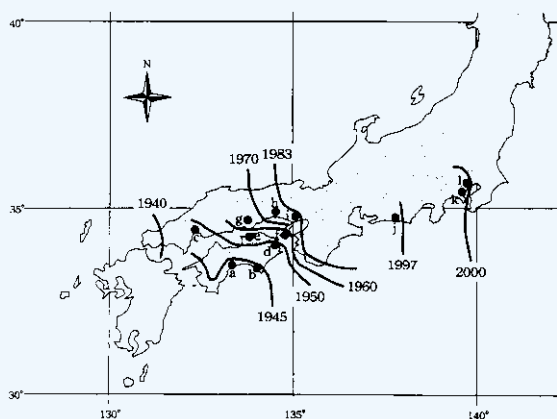


図1 ナガサキアゲハの分布拡大（北原ら, 2001）



図2 キオビエダシャク 上がオス 下がメス

耐寒性を増すなどの生理的な性質は変えずに、温度の上昇に伴って分布を北へ広げたと結論しています（吉尾・石井, 2001）。

キオビエダシャク（図2）

これはチョウではなく、南方系のガの一種です。四国には分布していません。沖縄県や鹿児島県奄美大島付近に普通にいたガでした。このガが2000年ごろから鹿児島県の本土でも見られるようになり、現在では鹿児島県のほとんどの地域でごく普通に見られます。幼虫は、九州地方で防風垣によく使われるイヌマキの葉を食べ、餌はいくらでもあるといえます。増え方も急速で、2～3年で鹿児島県の北部近くまで広がりました。一度にたくさんの幼虫が付くと、木が枯れることもあります。

このほかにも多くの昆虫が分布を北へ拡大しつつあることが知られています。もともと生物の分布域が時間によって変動することは不思議なことではありません。しかし、その変動がある方向へ向いたり、急速に変化するとき、その変化が何を意味しているのかを調べるのは大切なことです。

また、温暖化が間違いなく起こって生物に影響を与えているとしたら、逆に標高の高いところにすんでいるものがどうなっていくのか、それもまた注目したいものです。

（昆虫担当：大原賢二）

【引用文献】

吉尾政信・石井実, 2001. 日本生態学会誌, 51: 125-130.
吉尾政信, 2002. 昆虫と自然, 37(1): 4-7.

モモ? それともスモモ?

早春のある日、徳島市の遺跡を調査している人から質問の電話がありました。「平安時代の遺跡から何かの種子が出てきたので調べて欲しい」と言うのです。見てみるとモモの“核”のようでしたが、念のためちゃんと調べることにしました。

一般にモモの“種”^{たね}と思われるものは、“核”^{ないかひ}(=内果皮)と呼ばれるもので(図1)、じつは本当の種子はこの中に入っています。この“核”を持っているものには、アンズ、ウメ、そしてスモモなどがあります。この内、ウメは表面に小さな穴が開くのでモモとは区別が付きません(図2)。アンズは表面に皺がなく、全体が丸いのでモモとはかなり違います(図3)。ところがスモモについてはいくら本を調べてもよくわかりません。

仕方がないので、スモモを買いに行くことにしました。でも、スモモの時期は夏頃。春に買いに行っても売っていません。あちこち歩き回ってようやく干したアメリカ産プラムを見つけました。確かスモモは英語で“プラム”だったはずです。さっそく買って食べてみると、中から出てきたのは平べったくてつるっとした核(図4)。「やった!これで大丈夫!」。どうやらモモの核とは全然違うようです。

それからしばらく経ってのこと。家で何気なく果物の本を手にとって、スモモの所を開いてみて驚きました。その本によると、どうもプラムは在来のニホンスモモとは別物のようなのです。しかも、ニホンスモモの在来品種は栽培が難しく、最近ではほとんど栽培されていないとまで書かれています。

弱り果^はてて、果物屋さんで働く知人に相談したところ、青果市場まで調べてくれたのですが、結局、ニホンスモモの在来品種は見つかりませんでした。

それからずいぶん経ってようやく手に入ったのは“大石早生^{おおいしなま}”というニホンスモモの一品種。食べてみるとその核はずっと平べったくて、モモの核とは全く異なるものでした(図5)。やはり遺跡から出てきたのはモモの核のようです。けれども、なにぶん大石早生は日本在来品種にいろいろなス

モモのなかまを交雑^{こうざつ}してつくられたものと言われていてますので完全には安心できません。いつか、在来のニホンスモモの核を見たいものです。

(植物担当：茨木 靖)



図1 モモの核



図2 ウメの核

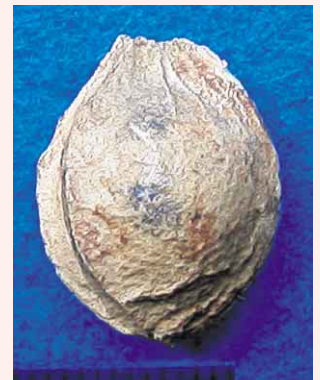


図3 アンズの核



図4 プラムの核



図5 大石早生の核

7月から9月までの博物館普及行事

あなたも参加してみませんか？

シリーズ名	行事名	実施日	実施時間	対象(人数)
野外自然かんさつ	川魚かんさつ	7月4日	9:30~12:00	小学生から一般(40人)
	漂着物を探そう!	7月25日	9:00~17:30	小学生から一般(30人)
	水生昆虫のかんさつ	8月1日	10:00~12:00	小学生から一般(50人)
	鳴く虫のかんさつ	9月11日	19:00~21:00	小学生から一般(30人)
	河口のいきもの	9月12日	10:00~12:00	小学生から一般(60人)
	白亜紀の地層を歩こう	9月26日	13:00~15:30	小学生から一般(20人)
歴史体験	火おこし①	7月24日	10:00~12:00	小学生から一般(30人)
	戦時中の食事・すいとんをつくろう	8月15日	10:30~12:00	小学生から一般(30人)
	火おこし②	8月22日	10:00~12:00	小学生から一般(30人)
歴史散歩	砲台場を調べよう	7月4日	13:30~15:30	小学校高学年から一般(30人)
	古墳見学②	9月19日	10:30~16:00	小学生から一般(40人)
ミュージアムトーク	蜂須賀家と茶の湯	8月14日	13:30~15:00	小学生から一般(50人)
室内実習	恐竜の歯のレプリカをつくろう	7月11日	13:30~16:00	小学校高学年から一般(20人)
	植物標本の作り方・名前の調べ方	8月1日	10:00~15:00	小学生から一般(30人)
	標本の名前を調べる会	8月24日	10:00~16:00	小学生から一般
	ミクロの世界—電子顕微鏡で植物を見よう①	9月5日	13:30~15:30	小学生から一般(10人)
	ジグソー国旗で遊ぼう	9月18日	10:30~12:00	小学生から一般(30人)
歴史文化講座(移動講座)	県南の歴史と文化③	7月25日	13:30~15:00	小学生から一般(50人)
	県南の歴史と文化④	8月22日	13:30~15:00	小学生から一般(50人)
みどりの探検隊	夏の吉野川に咲く花を探そう	7月18日	13:00~16:00	小学生から一般(10人)
みどりの工作隊	押し葉カルタで遊ぼう	8月8日	10:00~13:00	小学生から一般(30人)
	葉脈標本でしおりをつくろう	8月29日	10:00~13:00	小学生から一般(30人)
企画展関連行事	企画展「エビとカニ」展示解説①	8月15日	14:00~15:00	小学生から一般
	企画展「エビとカニ」展示解説②	8月22日	14:00~15:00	小学生から一般
特別陳列関連行事	特別陳列「収蔵品展」展示解説②	7月18日	14:00~15:00	小学生から一般

◎ミュージアムトーク、歴史文化講座、企画展・特別陳列関連行事および「標本の名前を調べる会」は申し込み不要です。その他の行事は往復はがきでお申し込みください。(受付は各行事の1カ月前から。10日前必着をお願いします。)

◎小学生が参加する場合は保護者同伴です。

◎企画展関連行事には企画展観覧料が必要です。(その他の行事は無料です。)

◎申し込み・問い合わせは徳島県立博物館普及係まで。

普及行事のお申し込みについて

- 往復はがきに
1. 参加希望行事名(1枚のはがきに1行事)
 2. 参加希望者全員の氏名(保護者名と、児童・生徒の場合は学年も)
 3. 住所
 4. 電話番号

を記入し、行事の1ヶ月前から10日前までに必着で下記までお申し込みください。(午前・午後の2回行われる行事については、午前・午後の希望も書いてください。)

返信用はがきの住所・氏名も忘れずに記入しておいてください。

希望者が多数の場合は抽選し、詳しいことは当選された方にお知らせします。原則として、参加費は無料です。



●申込先 〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館 普及係 TEL(088)668-3636

博物館ニュース No.55

■発行年月日 2004年6月25日
 ■編集・発行 徳島県立博物館 〒770-8070 徳島市八万町向寺山
 TEL088-668-3636 FAX088-668-7197
<http://www.museum.comet.go.jp>